

「草取仁王尊」など稲作や雑草防除に関わる
千葉県内の伝説・民話

森田 弘彦

筆者が住み始めてほぼ10年経つ千葉県は、東京都に隣接する大きな農業県で2024年の子実用水稲作付面積5.06万haは全国9位である（農水省 令和6年産水稲の作付面積及び10月25日現在の予想収穫量）。その為かどうかはともかく、かつて稲作に関わった人々が神仏の加護や妨害を説話や民話として伝えてきた。

疫病で働けなくなった村人に代わって「^{くさど}耨り」した仁王様が次のように伝わる（平野元三郎・畠山哲明「房総の民話」, 1957）。

長生郡長南町蔵持に草取仁王というのがあつた。長和年中（約950年前）恵心僧都が悪魔降伏のために作ったのだという。ある時、村に悪い病気が流行して働く人ささいなくなったので、タンポは草ぼうぼうに荒れてしまった。人々は、このことを仁王様に祈つたところ、一夜にして田の草は全く取り去られた。そして田の中には、大きな足跡だけが残っていたということである。

現在の「草取仁王尊」は、房総横断道路の国道409号線の蔵持交差点の近くにあつて（図-1）、仁王堂には「御縁起（図-2）」、堂の横には町教育委員会の「長南町指定有形文化財 木造金剛力士像（草取仁王）平成18年12月25日指定」の説明看板がある。説明看板には「この伝説の史料上の初見は中村国香（1709-1769）の『房総志料』と思われる。」とあり、上総夷隅郡長者村の中村国香が宝暦11（1761）年に訪れた名所旧跡を記した「房総志料」を見ると（「改訂 房

総叢書 第三輯」収録, 1959）、確かに以下の記述がある。

植生郡蔵持村に、土俗相傳へて草取二王と稱するあり。道の側に寺もなく、二王門のみたり。古は寺なども有ししが、後世廢せしと見ゆ。彼土人の説に、いづれの比にや、一村疫疾盛んに行はれ、村民盡く農事を廢す。時に二王夜毎に出でて耨り、手足泥に塗、民勞にかはりしと。近代は清浄院といふ寺に隸す。盜ありて装治する處の眼球を鑿去ると。今は二王も彼寺に遷し、道傍には礎石のみを存すと。

約260年の間、ほぼ同じ形で伝わった伝説で、雑草とその防除に関わる者は一度は仁王様に参拝しておくのがよいと思う。Web上には「童話の部屋（<http://benikun.s1009.xrea.com/densetu2.html>）」などいくつかの解説がある。

前掲の「房総の民話」にはまた、現南房総市（丸山町）の石堂寺の仁王様の話もある。

…むかし、水田が青むころ、仁王様は毎日夜になるとこつそり二人連れでタンポを見回り、大きな足にわざと沢山のヒルを吸いつけて帰つた。そのため、この付近のタンポにはヒルが全くいなくなつて百姓は仕事が大変楽になつたのだそうである。（後略）

除草と並ぶ重労働であつた田植えへの加護についても以下の伝説がある（奈良輪美智野「ふるさと伝説 清和・周南」, 1986）。

「（君津市）小山野に字夜田向という所がある。昔、田植えの最中に或る家の人が病気になる田植えが出来なくなった。そこで近所の人達が田植えを手伝いに行った。ところが田植えが終わらないうち



図-1 疫病で倒れた村人に代わって「耨（くさど）り」したと伝えられる「草取仁王尊」を安置する仁王堂（千葉県長南町蔵持）



図-2 「草取仁王尊」の「額」と「御縁起」（図-1に同じ）



図-3 夜毎に飛び出して田畑を荒らしたと伝えられる、伝・左甚五郎作の彫刻「眼つぶしの鴨」(千葉県流山市鱈ヶ崎、東福寺)



図-4 「眼つぶしの鴨」を持つ東福寺の中門(場所は図-3に同じ)

に日が暮れてしまった。仕方ないので、苗をぶったまゝ帰ってしまった。あくる日田んぼに行ってみると、不思議なことに田んぼにはもう苗が植えてあったという。人々は驚いていろいろと調べているうちに、西了寺という寺に行ってみると、漸くわかった。それは此の寺の玄関がどろだらけになっていたと云うことから中に入ってみると、御本尊様もどろだらけになっていたそうである。よって人々は此の御本尊様が田植えをやってくれたのだと納得したそうである。それからは田んぼへ苗をぶったまゝで置くものではないと云い伝えられている。

神仏の田植え援助の話は古くからあったようで、千葉県ではないが、大治末年(1130)前後の成立とされる「観音替信女殖田事」では「河内国で、同じ日に20か所も田植えの手伝いを約束してしまった女が、1か所は何とかなるもの残り19か所をどうしようと、途方に暮れて日頃信心している観音様に祈りながら寝てしまう。翌朝、1か所目の人をはじめ、約束したところから田植えの謝意が届き、不審に思って観音様を見ると、腰から足まで泥にまみれ、右手に苗を持って立っていたので、同女は感激した。観音様の植えた田はことのほか良い出来であったという。」と説く(川口久雄校訂「梅沢本 古本説話集」, 1965)。

話を千葉県に戻して、人々を困らせた例として、流山市鱈ヶ崎の東福寺には田畑を荒らした彫刻のカモ(図-3, 図-4)の話が伝わる(高橋一元編「流山の史跡をたずねて」, 1974)。

…また、ここの山門(筆者注:実際は中門)は日光東照宮造営の際、材料の一部が寄贈され、それで建立されたといわれ、そのかも居には「目つぶしの鴨」という彫刻があります。左甚五郎作と伝えられていますが、この鴨について、次のような民話が残されています。

昔、夜な夜な人々が一生懸命につくった田や、畑が荒されるので、村人たちが不思議に思い、いろいろ調べてみましたが、その犯人が見つかりません。いつ、どこから、だれが来て荒らすのか、ずっと見張ってみようということになり、村人が朝から夜になるまでじっと見張っていたところ、或日一羽の鴨がやって来て盛んに荒して行

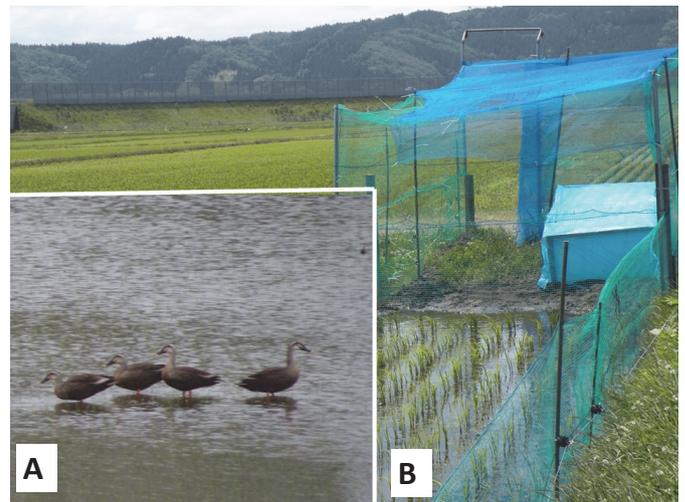


図-5 「悪いカモ? と善いかモ? (A: イネの苗立ち中の湛水直播水田に侵入したカルガモ, B: 保護設備に守られるアイガモ放飼水田, とともに秋田県南部)

きました。それでどこに行くかと後をつけてみると、当寺の山門近くで見えなくなり、あちこち探しているうちに、山門のかも居に泥がいっぱいついていました。さらに上を見ると彫刻の鴨の足にも泥がついています。そこで村人たちはすぐに五寸クギ(約15センチ)をその鴨の眼に打ち込んでしまいました。すると翌日から田畑は少しも荒らされなくなったといえます。

悪者扱いされたカモの彫刻であるが、畑はさて置いて田に限れば、このカモはイネの害虫や雑草を食べ、田面を攪拌していたのかもしれない(図-5)。村人がもう少し詳しく観察していたら、「アイガモ農法の始祖」の伝説に変わっていた可能性も残る。名工左甚五郎ならば、人助けを念頭にカモを彫った、と思いたい。

読者諸賢の身近にも残るに違いない類似の話を含めて、これらが未永く伝えられることと併せて、農業技術の革新のもとでも、稲作や雑草防除をめぐる新たな伝説が生まれてくることを望みたい。